WASON
HQ
1104
J74+

Aug 11
1888
no. 122

The Woman's Magazine

女學雜誌

版權所有

一冊五錢

各土曜日出版

當府内無郵税

明治廿一年（第百貳拾貳號）八月十一日發

社説
無名の英雄、戸田の戰死○遊廓の開業式、我が總理大臣及諸新聞記者を招待せんとす

論説
女子教育主義（大鳥圭介）○日本婦人の服裝（渡邊鼎）

批評
女界の國粹保存論○讀賣新聞美人組成説

叢話
慈善なる貴婦人方に下宿屋料理屋を設けられんことを望む（内村鑑三）○一唱百歎○樹陰に徘徊す○煙草を飲むの利害○百人一首一口話

小説
さすがに双紙○小説神髄

佳傳
ラマバイ女史

寄書
日本婦人の洋裝（在米國根本正）

小供談

外報

新報

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 122. August 11th, 1888.

EDITORIAL:— Nameless Heroes and Deaths on the Domestic Battle field; The Opening of Some Public Houses.

LEADING ARTICLES:— The Spirit of Woman's Education, by Senator K. Ōtori; Japanese Ladies and Foreign Styles of Dress, by Dr. K. Watanabe.

CRITICAL NOTES:—Nationality and the Woman's Sphere. Essentials of the Ideal Woman hood.

MISCELLANIES:— A Suggestion to the Ladies about Opening model Restaurants and Boarding-houses; Gold Dust; Recreation in Summer; Good and Evil of Tobacco. On Ode from "The Hundred Odes."

NOVELS:—"Sasugani."(VII); "Bouquet of Novels."

BIOGRAPHIES:— Punditta Ramabai Sarasvati.

CHILDREN'S COLUMN.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

一册枚數七十葉定價二十錢全國無郵稅

去月十三日出版せり

通信女學第十一巻發兌

蓋し最良の教科書

婦人會員の會讀及戸内の獨學に宜ろし

女學雜誌社

●昔時の女子 （其二）

簑笠菴主人編

○男はわが妻を指してツマと云ひ女もわが夫を指してツマと云ふこと怪しきやうなれど蓋は衣の襴の端をツマと云ひ衣を着る時は前にて合はすに左右のつま重なり合ふなり男を左とし女を右とするは常の事なり左ればかたみにツマと呼ぶもの之より言ひ初めしなるべし新古今釋教部不邪婬戒の歌に寂然法師

さらぬだに重きか上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ、とよめるもの女をのみ戒しむるに非らず（洋の邊）

○當時世に名高き或書家の女或高貴の御室の御側に仕へぬるを早くより我を召して御歌の添削仰せ玉ふ序でに其の女も歌よみ出したるをいぶかりしに傍らに御局ありて云くこの女の父の女にいへるには御館にて和様文字かく人にたより手習らひすべし歌よむ人あらば隨ひて讀み習ふべし少女の漢様文字かき詩文章つくるは傍よりつらにくゝ思ふものなり和様文字かきて歌よむ女は床しくなつかしく思はるゝものなりと戒しめしよし語れり漢様の書家には珍らしき大先生なり故ありて御館をも先生の名をも現はしがたけれど大方は人も推測り知るべし（かたびさし）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第百廿貳號 明治二十一年八月十一日發兌

社説

○無名の英雄、戸内の戰死。（中）。

古來、多くの英雄豪傑君子學者が世に出でたるが、其の出づるや、決して偶然に非ず、敢て忽焉として譯もなく現はれたるに非ず、能く其の由る所ろを察し、其の來る所ろを吟味すれば、一人として偶然忽焉に出現したるにてはなく、皆あろれ〳〵に相應なる元因あつて、是非とも斯く出現せねば成らざりしとが分かる」。近年、日本の文明は非常に進步して、多くの學者が續々と現はれ出でました、之を二三十年前の昔しに比らべ見れば、日本は實に僅かなる年月の間だに於て、濟々たる多士を斯く迄に得たると、眞とに尤も驚ろくべきである。之は、二三十年前迄の日本人には、之れなくして、其の後ちに出でたる日本人にのみ存する、一種の天の賜ものあつて、而して斯く俄はかに學者たるを得る輩らが增加したるに在る乎、即はち前代の人々に存せざりし性質が、近年に至つて初めて湧き出でたるにある乎、天は特更ら新日本に學者を天降らせ、忽焉として玆に此の新種類の人間を造らせ玉ひしに在る乎。決して然らず。密かに考ふるに、近代の日本には、是非とも斯る學者が多く出で現はれねば成らぬ、其の出で現はれねば成らぬ元因が數多く存在するを見るです。嘗て蘭學事始と云へる書物を讀みたるに、昔し、蘭學者が始めて蘭學を學びたるときは、實に、今の吾人が決して想像し能はざる所ろの、困難を爲したりと見ゆる。僅かにイロハを習ひたるものが、直ちに生理解剖の事を論じたる書物に對ひ、別段和譯したる字引とては無く、只だ原語の字彙に引當てゝ一字一字を睨らみ讀みにし、眉の圖の傍わらに何か原語が記してあれば、此の原語を字彙に當てゝ其の字義を正し、先づ顏の中の高い所ろと講じあるとに定め、此の高いと云へる字を更らに引出して、次に山と云へる字を覓め出す如く、只管盲目さがしに、さがして、其都度々々、當推量の譯を下し、一日に一二寸の文章一行を解し兼ねたる程ありしが、一ケ年半も立つ内には、漸やく一日に十行余りを讀み得るに至り、莫大の進步ぞと喜びたりと記しある。之れより后ちは追々と書物も傳わり、蘭學者も殖え、決して最初の如き困難はあらざりしとの事なれども、今まの加藤弘之君などが、每度吾人に直談ある所ろを聞けば、迚も今の洋學者が夢にも考へられん困難が、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

多くあつたです、先づ平日讀む所ろの蘭書は、一々之を寫したてす、固より十分なる字引は無し、固より大きな顔をして學問は出來ず、困難の上にも、戰々競々として、火を負ひ物を盜む如くに勉强されたと聞く。然るに、今の學問を爲すものは、至る所ろに學校あり、至る所ろに博士あり、至る所ろに數多の書籍あり、政府は之を奬勵し、親兄弟は之を督促し、世間惣躰は褒美の冠を用意して、其の學問を勵むものゝあらんとを待構へてある。此時勢に於て學者の多く出て來るは、固より當然の數にて、若し學者出でずとあらば、反つて之を大ひに奇しむべきとにてあらう。左れば、今日、如此くに多士の現はれ來るは、啻に其人自身の力量にはあらず、先づ彼の學校のお蔭である、書物のお蔭である、更らに大きく申さば、即はち方今の文明のお蔭である、然し啻に方今の文明のお蔭のみにあらず、亦、昔し那の如くに骨を折て苦學されたる、彼の先達方のお蔭にも由るは勿論、歐米よりして數多の新書籍を持來らする所ろの蒸氣船、及び此の蒸氣船の内に於て眞黒に成り居つたる火燒の黑奴、もしくは、此の新書籍を自由に賣捌きする、丸善、集成社の手稚小僧に至るまでが、今の大學者を造り出すに對して、皆なそれ〴〵の功能ある者であらう。而して、之は只だ學者にのみ就て申したるとなるが、其他、君子英雄豪傑に就て云ふとも、亦皆な同樣なる數多の元因あつて、其の元因よりして此等の偉人が現はれ來るにてある。シテ其の元因と云へるものにも、前に申したる外に、尚亦たいろ〳〵の多くの元因があるです。例へば、人物は、四面の感化によつて種々に變り行くものゆえ、若し擇んで仁に居れば、善者が出來べく、若し陋猥なる巷たに在れば、知らず識らずして不善の人が出來やう。故に、孟子は、孟子の母によつて聖人と成つたと云ふは、稍や宜ろしきを得たる論であるが、之を孟母の力にのみ歸するは未だ至らぬ、孟子にして、若し市にありしならば商人となりしかも知れぬ、寺の傍わらに在りしならば坊主となりしかも知れぬ、然し學校の近邊に行てのちに、初めて其行儀が改まりしと云ふよれば、孟子を孟子と爲したるは、啻に其の母にのみ由らず、彼の學校の先生、生徒、及び日々の禮樂の稽古までが、皆な與かつて、之を聖人にしたるものにてあらう。ダルヰンが大議論を吐くに至りしには、先づ其の細君の助けもあらう、マルサスの議論もあらう、ビーグル號の航海もあらう、更らに航海が彼をして一まとめに通覽せしめたる世界一週の界色も之を助

けたらん、又更らに其の老祖父が万象を一躰に見て詠出したる名吟、及び其名吟のチンチコ歌にもあらう、固より數多の元因が集まり合つて、初めて茲にチャーレス、ダルヰンと云へる理學者を造り、又た此の大理學者をして、初めて茲に其の大議論を吐くに至らしめたるにてあらうと思ふ。」次ぎは亦た、遺傳と云へるとあり。偉人英雄の出づるには、固より既でに、十數代前よりしての、一種の大貯蓄があるゆえに因るなり、ガルトンと云ふ學者は、甚はだ面白く此理を研究したるが、其著書に由て見れば、大抵の偉人は、大抵亦た其血緣が立派である。昔し、支那の達人は、后世我家より丞相が起るならんと云つて、其の豫言に、槐の樹を植えて置いた、新田義貞も、同じき信仰を持つて失せ行いたと傳してあるが、思ふに、之れは必らずしも空想にあらず、先づ初めに斯く計り自信するほどの人物あつて、此の先祖より傳はり來れる血統が、集まり〳〵て遂に大偉人を后代に出現せしむるともあらう。故に、正直なる老母が、行燈の傍らに縫針し、世を忍ぶ伏龍が、茅屋の下に繩を綯うとき、此の夫婦は全く世より沒し去るかと云へば、此の沒し行くは僅かに木の下をくゞる所ろの水の如くで、其美質は後ちに遂に大ひに現はれずして止むものにあらず。左れば、野に在る所ろの賢人君子は、何如に其當の身が世に用ひられざるとも、敢て失望落膽するなく、只だ日に日に徳を積むべし、徳の積まざるを憂へよ、敢て徳の其の當日に現はれざるを憂ふる勿れ、陰徳には必らず陽報あり、他日必らず其子孫に大ひに爲す有るの人を生ずるとを得ると確信せよ。實に確信せねば成らぬとにて、天下の偉人人物は、皆な其の祖先親族より、才力徳性を遺傳せられ、即はち其の人に至つて大ひに發揚したる者である。」而して更らに一つの尤も直接なる原因と云ふべきは、此の英雄と共に働らき、此の英雄と共に其事業に奔走したる、數多の助け手合力者にてあるなり。固より、ナポレヲン、シーザー、太閤、高祖等は、英雄なりしに相違なし、然し、此の諸英雄をして、斯の如くに大英雄たるの名を得せしめたるには、其の幕下に、無數の小ナポレオン、小シーザー、小太閤、小高祖がありしに由る。故にナポレヲンと云ひ、太閤と云ふは、一種の普通名詞にてあり、其の下には數多の、固有名詞が隱れて居る、シーザーと云ひ、高祖と云ふも、亦一種の旗じるしにてあり、其旗下にはジウリアス殿、沛公を初めとして、數多の英雄が打そろひて居るです。

先づ此の如くに考うれば、今ま茲に一人の英雄ありとせんに、此の英雄が英雄たるは、敢て其英雄彼自身が力にのみ由るに非ず、之をして英雄たらしめたる、數多の元因ありて存すると知らる。故に、凡そ此の英雄を尊しとするものは、亦た此をして英雄たらしめたる、數多の助け手合力者をも尊しとせざる可らず、世の中の大事業は、決して一人の英雄、一人の偉人の手に由て成りたるものにあらずと知らねば成らぬ。左れば、偉人英雄を燈明光に喩へたるは宜しひ、成程燈明光として光るものは、只だ其の光りであらう、然し之をして光を發せしむるには、岸頭に、一つ一つの石を積み、一つ一つにシツクヒを塗り、漸く燈明台を築き上げ、扨て燈心を用意し、油を用意し、玆に火を點して、初めて燦然たる燈明光と爲るです。故にジヨンロードが、英雄偉人を燈明光に喩へたるは宜ろし、然し此の燈明光のみが光を照らすの功を爲したりと思はゞ、既に誤まりである。彼の旗じるしたる、普通名詞たる、即はち表に名代と爲つて現はれたる英雄を指して、此の英雄がひとり世に大功を成したりと云はゞ、是又實に大ひなる誤まりである。

ソクラツトの學力ありても水をあびせる妻あり、ウエスレーの道徳ありても頭を引づる妻あり、ミルトンの美貌ありても頑悪なる妻あり、あきらめねば成らぬ。

論説

○女子敎育の主義（其三）

大鳥圭介　社員筆記

是より、女子の心得方を四段に分ちて話すべし、

第一　女子の德義　　第二　女子の家政
第三　女子の修業　　第四　女子の衣服

一、女子の德義。

抑も、女性は天賦柔弱、神經鋭敏よして、忍耐の力に富み、男性と自然に異なる所あり。夫ゆへ、全躰幼稚の時分に、男女一所に敎育して宜しいと云ふ說と、又男女は別けて敎育しなければならぬと云ふ說があつて、西洋でも矢張說が二つよなり居り、何れが宜しいか私等には分らんが、大躰餘計に然う違いが無いと思ふ。之に因て又、男子の幼稚の時分よ受る敎育と、女子の幼稚の時分に受る敎育を、後にこそ違ひがあるが、最初は一所でもよからうと云ふ說を立てる人もあるが、私しは日本の習慣によつて考ふれば、既に七歳不同席などの風習もある折、格別外に害のないとあらば、十二三才に及べば別にしたら宜からうと思ひます。手習などは、今まで寺小屋と云ふ所よ一所に參つて敎へられ、又本なども讀みましたが、私は別に出きるならば別と云ふ說です。又婦人の德義と

社説 （其二）

○遊廓の開業式、

我が總理大臣並に諸新聞記者を招待せんとす。

承たまはるに、此度地所を府外隔遠の端てに賜はり、專ぱら之を遠ざくるの御主旨に合はせて、只だ止むを得ず設置を許されたる、彼申すにだに恥はしき洲崎の新遊廓は、來る九月一日より三日間、甚はだ盛んなる開業式を執行するの相談あり、去四日、あらかたに定まつたる當日の段取あるものを聞に、先遊廓の入口に、大の木造門をしつらへ、一千五百の娼妓が名を染出したる、球燈を門より大通りへ掛列らね、數本の臨時仁和賀を出し、沖合にて仕掛花火を打上、費用凡そ一万圓を投打つて、尤もにぎ〳〵しく其式を執り行うとぞ。吾人は此等の目論見に頓着するものにあらず、如何にとも御勝手に騷ぎ廻らるゝに放任し去るとは云へども、茲に甚はだ聞棄難き一個の事件あり、即ち、貸座敷の主人は、藍甲斐絹鱗紋附の單衣、黒絽の羽織、仙臺平の袴を着用し、妓夫其外の雇人は、淺黄地の眞岡木綿に、洲崎貸座敷の文字を染ぬきたる單衣を引かけ、先づ伯爵黒田總理大臣を初めとし奉まつり、高崎東京府知事、三島警視總監、府會各議員、東京府土木課員、本郷深川兩區長、新聞記者諸氏を招待し參らする云々、而して

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

其目前に於て催うす仁和賀趣向の中ちには、雨宿り濡て深川、初會浦島廓の釣堀、柱立色の地固、なんと申すも之れ有やの由、天下の奇怪之に過たるはあらず。そも〳〵苟くも清潔の德を守るものにして、方今、誰れか敢て遊廓の内に一歩をだも足踏すべき、況してや白晝數萬目の眼前に於て、身に伯爵を負ひ位人臣を窮めたる御方より、平素國家の道義矯風に一身を委ねらるゝ士君子に至るまでが、何如にしてか敢て此の汚穢不潔の地に參會せらるべきぞ。察するに、斯る招待の計畫は悉とく畫餅に屬し、其の懇望する上官君子は、遥かに靑雲明氣の上に在りてなか〳〵に此の濁江の中には舞ひ下られまじくとは確信す。但だ吾人は彼等が、大膽にも此類の上官君子を招待するに相談したるを怪しみ、又彼等が此類上官君子の參會せらるべきやに望を置くを怪しみ、更らに又彼等が、無遠慮無頓着に世上の清氣をけがし來らんとするを怪しみ、甚だ奇怪の思に堪へざるもの也。然りと雖ども、若し万一にも、夢にだも、此類の上官士君子が此の招待に應ぜられたりとせば、公然として白晝此の遊廓に入り公然として娼妓妓夫に接し、公然として彼の仁和賀馬鹿をどりを觀らるゝとせば、天下の奇怪更らに之に過たるはあらず、吾人は當日其有無を正し若し之れ有りとせば、啻に之を明記して三千八百万の同胞に訴うるは勿論、更らに之を譯して、歐米外國の諸新聞紙に公告することを猶豫せざる可し。

云ふヿに至て、學校にて教師に教へられたる古人の嘉言善行は能く學び覺へ、斯う云ふ貴女があつた、斯う云ふ賢母があつたと、讀本などにも澤山あるが、其本にある稽古したことを、今日家に歸て行ふのが難いので、物は履行するが實に六ヶ敷のであります。併し若し是れが出來ぬなれバ、孝子の傳を十も二十も覺へ、或は貞女の傳を三冊も五冊も讀んだ所が、自分が夫に對して行へないなれば、詰らんヿであらう。讀んで講釋するヿは甘いが、夫に對して事が行へないなれバ、所謂論語讀みの論語知らずである。

二、女子の家政。

次に、人世は誠よ不幸の多いもので、或いは今日盛んでも、二三年の後に貧困に陷らないとも期し難い、是非一身一家の儉約をして、後の考をしなければならない、貧困にあつてから、サアと氣がついても、何もならん、早くから其計をして、金を貯めなければ往かん、金を貯るヿが益々盛にあつても、一向差支はない、此事ハ婦人に於て最も大切のヿと思ひます。併し、全躰家政を執るに就て、日本の婦人は、儉約ハ餘程能くする方の質です、ナカ〳〵細かであるが、多くハ亭主が惡るひので、亭主の方が詰らぬものを買ッたり、書畵を買ッたり、或いはクダラヌ物を求める、元來其猶豫があるなれバ宜しいが、實際は左樣でないので、ドウモ女の思ふ樣にも參らんヿがある、此の如き家は、外から見れば、大層工面が宜しい樣でも、內幕ハ隨分苦しいもので、是れは強ち婦人の惡るいのでもありません、婦人もナカ〳〵骨が折れるです。併し婦人ハ、朝夕家に居り、會計の容子を一々承知して居らなければならぬ役で、夫たるものは、町家なれバ色々の懸引があり、官員なれバ役所で色々用があるから、是れハ男でハ往かん、つまり、女が詰らぬ買物などハせず、餘り流行に走ッて、隣りの人が斯う云ふ縞の着物を拵へたから、私もと云ふ樣な若い時分は、無理もないが、能く前後を分別し、篤と考なければならぬヿであります。西洋の婦人などは、毎日出て歩ッて、實に奢ッた樣であるが、實際然うでない。先刻も申す通り、臺所まで細かにする風で、只慣習が違ふのです。日本婦人の心の付け方と、西洋婦人の心の付け所が、少し違ひます。西洋でハ、今日費すべき筋には思切ッて費やしますが、費すべからざる筋には、決して費さないキタナイ位です。西洋に居ッた人などハ、能く御存じですが、其の役所にでも出る人は、其の役所に衣服をかける針があつて、其針に上衣を懸け

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

置て、別に古るいのを掛けて置たるを取ッて着て働らき、夕方の四時頃にでもなれば、又良き服を着て歸るです。日本には然う云ふ人は見へない、有ても僅かであらうと思ひます、或は着物などは構わんと云ふかも知れない、然し新らしきものを汚さない様にする點と、役所で働く時分には衣服にも構はぬと云ふ點に至ては、實に感心であります。始終立派の着物を着て居る人は、多くは換りの衣のないもので、却て粗末の着物を着て居る人の方が、着換の有るものです。勿論、西洋や亞米利加にも、非常に奢ッて居る人もある、又非常の金持もある、衣服でも、車でも、其立派なると實に眼を驚かすばかりで、日本などには迚もソンナ人の無いこともある、又其位の山師があつて、之を以て一ッの飯を食ふ種にして居るのもある。隨分、日本にもありませうが、此等を見て、西洋の婦人は立派なりと云ふて、眞似しやうと思ッても、日本の中等の婦人では、決して眞似の出きるものではありません。ソレ故に、今日女學校等にて稽古さるゝ人、又女の子を持て居るか、妹子のあるお方の肝要なることは、家政の立て方、及儉約のことを教へるが、第一の箇條よして、其次に、交際とか、或は學問して外國の事を學ぶとか、音樂を學ぶとなどは、第二段にして、猶豫があつてからの話です。先づ家を守り、何程かの金錢を貯ることが大切と思ひます。學問もしなければならぬが、學問して金を費ッて、役に立たぬなれば、尙ほ詰らぬ、左ればとて、私は、決して吝嗇をせよと忠告するのではありません。

其上、西洋の女は、大層に働きます、殊に亞米利加に多いが、電信局、郵便局、其外諸製造場で、大層女を使います。昔しは、男子ばかりの職人であつたが、中等の女でも、隨分困窮することもあり、女子を使へば向ふも助かり、兩方の都合がよろしいと云ふので、今日は大抵の所で女を使ひます。

先づ何う云ふことをするかと云へば、帳面をつける簿記とか、郵便の配達物を包むとか、又物を封じるとか、是等は澤山の仕事です、襟飾のピンを製造する所などでは、十本なり、二十本なり、紙に包み、是れを百なら百、合せて函に入れるのです、其賃銀は、能くも知りませんが、佛蘭西などでは、一日三フランクです、一月に十八圓ばかり、一年には三百圓位まで取る人があると云ふ、僅かの金ではあるが、婦人のことですから、誠に立派の仕事です。不幸にして、亭主が沒なるとか、其他のことに就て、亭主と共稼ぎをしなければならぬことが儘あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るもので御座います、若し其時に、是れが出きたならば、餘程宜からうと思ひます。併し、今日本にては餘り然う云ふとは遣りません、僅に紙を漉く位のものだが、若し茲に十人なり十五人ありの女職工があつて、使ッて呉れと云つたなら、社長が許して使いませうか、使ッて呉れゝば宜しいが、金は欲しくも、節操がなく、職人と詰らぬ話をするとか、猥褻の事を為すか、一向氣性もなく、學問もなくては、仕樣がない、簿記が出きるとか、或は英學とか、箱の番號とか、何か綿密に出きるとか、婦人一通りの教育が無ければ、安心しては使はれまいと思ひます。私が製造場の社長でも、詰らんものが大勢來て、場所を亂す樣なとがあつては、大變だと思ひます、是れも能く婦人が心得置かなければならぬと思ひます。

次よ、家を治めるとに就て、日本の女と、西洋の女との間に、違うとがあると思ふ。西洋には、遺産の法があつて、父母が死ねば、身代の多寡によつて、小供兄弟に割付ける、拾萬圓の身代なれば、兄には何程、弟には幾らとか、國によつて違ひますが、兎も角分配法がある、日本には少しも無い、此點は日本と西洋とは非常の違ひです。今日は婦人ばかりで申さなければならんが、西洋では、親父が死んだ時は、壹萬なり五千ありの金を貰う、而して嫁にいつても、亭主に手を附けさせない、銀行か何かに預けて置いて、其出納は自身で致す。若し其父の家が金持でもあるなれば、莫大の金を貰う、百萬圓位の身代では、未だ金持の中ではないが、兄弟十人よて分けるとしても、拾萬圓宛には分ります。左れば、夫の方に參ッても、格別亭主の邪魔にならずして、利子ばかりでも、立派の着物は着られます。所が、日本では、中等の所で、拾萬所か、百圓も貰う人はあるまいと思ふ。殊によれば、借金の割振りを頂戴する位であります。如何にしても、婦人は夫の家に嫁してからは、百事夫を頼まなければならぬが、西洋の婦人の威張るのは、蓋し茲にあるものです。ソレ故に、日本の御婦人は尚更儉約をするのが第一で、自分で儉約をしなければ、親から貰うとは宛にはならん、親が死んでも、金は貰へそうもありません、自分で貯た金なれば、自由に出き、僅のとでも、人に依賴せずして出きます。婦人が儉約して、身代相應に金を貯蓄して行くとが出きれば、一家より遂に一國が富み、日本全國の富を致すとが出きます。言葉を換て申せば、一婦人の家を治めるは、天下の貧富盛衰に關係するものです。人には構はず、個々に心懸け、三千八百萬人が貯蓄すれ

ば、日本が金持になつたのです、是れハ男でハ往かん、女の方々に尤も要々なる勤めであります。先刻も申す通り、人間の富貴盛衰の定めなきこと、月に盈昃ある如く、御高取りの士族が何うとか、何うしたとか云ふ話しハ、隨分耳に聞へるが、偖立派になつたと云ふ人は、尠ないようです。此れで節儉の大切なることハ御了解になりませう、少しのことでも、氣のつけ次第で、遂にハ金持ちになれる、左れば紙一枚にでも、氣をつけねば往かん、一家ばかりでなく、天下も其通りであります。(未完)。

○洋服採用の可否如何ん、　　在米國　渡邊鼎

日本婦人諸君に告ぐ。(其二)

予一日數名の友人(歐米人)と談話中一友人予に問ふて曰く近來日本にてハ高貴の婦人又ハ學校女生徒等多く洋裝に改めたる由に聞きつるが何故に日本婦人方ハ日本服を好まざるか拙者抔ハ却て日本婦人服を善く思ひ居り候なりと予云く左れバ貴君等ハ日本婦人服を賛成だと申さるゝハ抑も如何なる點に在りや承りたし友人云く頗る立派なり予云く何を以て之を知れりや友人云く曾て日本婦人の壓し人形又ハ錦繪或ハ立派なる婦人服を見たるが多くハ絹を以て之を製し頗る立派にてありし予云く如何にも理解したり貴君等ハ人形や錦繪又ハ衣服を見て日本婦人服ハ立派と考へたるなり然し貴君等ハ日本婦人が一通りの衣服を着して歩行し又ハ働らく有樣を實際に目撃せしや友人云く否な未だなし予云く然らバ明晩ポスト町の某會堂に於て工藝書籍館長の夫人令孃等が催ふす茶會にハ二三の婦人方が戲れに日本婦人服を裝して出席する由予も亦招狀を受けたれハ幸ひ貴君等を同伴して其の現狀を實見したる上にて更に意見を述べ且批評を承らんとて翌日同氏等を同伴して會堂に至り日本服裝の婦人方を實際に目撃しながら語て云く予ハ先づ一通り日本婦人服に就き予の意見を述べ申うさん。」(第一)日本婦人服ハ上下共總躰の前部開放せるが故に歩行するときにハ脛部迄現はれ見へるのみか風の吹くとき抔ハ實に見惡るしき有樣にして手を以て之を支ゆるに非ざれバ安心して歩行すること能ハず加之みならず裾は脚部に纏ひ着き歩行に不便なり而て日本婦人の歩狀は八字形にして恰も中氣病みの足の如は蓋し衣服の形狀既にかゝる有樣なるが爲め自然歩狀を變たるものにて如何にも見苦しき事に候。(第二)長き袖の垂れ下て兩手の働きに不便なるのみならず腋下まで開け放ちてあるが故に戶外に出で强風に遇ふ時は腋下胸部の柔軟

なる皮膚へ直接に寒風の侵襲するの危險あり。（第三）日本婦人服は上下一連續に出來てあり衣服總躰の重みは皆一點の肩に持たするが故に呼吸の運動を妨げ大に肩の張ることや又は頭痛腦充血等の誘因となること少なからず加之ならず斯く上下一續の衣服は經濟上及便利上の一大缺點にして外見も亦餘り善きものに非ず。（第四）帶を大層に腹部に卷き着け而して背部に結び下げるは腹背を溫めるには宜しからんなれど其の目的なればフランチル腹帶にて澤山ならん立派な衣服の上に又更に斯樣に卷き着けるは眞に見惡るしきのみか無益のことにして之を以て別に衣類を拵ゆる方遙かに得策と云ふ可し察する所是は品物は澤山ありても智慧の足らない野蠻時代に用ひ始めたる遺物ならんか恐らく世界に無類の愚品と云ふ可なり。（第五）或人は和服に靴を穿つを良しとす何となれば足を外氣に曝すときは感冒若くは氣管支的の病氣に罹る云々と說をなす者あれども是を外氣に曝すより腋下胸及び脛脚等迄殆んど外氣に曝す衣服は却て危險ならん加之ならず和服の如く裾の纏う衣服に靴を穿ちては裾は直ちに汚れるのみか忽ち破れて頗る不經濟ならん又紐を着け指にて狹む工風の所謂木履を穿ちては靴の樣に自由に驅け行くことは勿論遠路を行くことは到底六ヶ敷ことにて途中にて紐が切れたるとき抔は跛を引きながら片手に木履を下げて歸らなければならぬと云ふ困難は度々あることにて不便至極なり。（第六）和服は上下に通じて開けるが故に步行する際には衣服の裏面翻轉して露はるゝを以て下着の裏面に至る迄盡く上着同樣の上等品を用ひざるを得ざるのみか自然數枚の衣服を重ねさるを得さる有樣にして不經濟も亦甚しと云ふ可し。（第七）和服は上下一連續にして且身の丈より少しく長く拵るを常とするが故に腰の周圍にて皺を作り紐にて之を結び帶の下に隱し込む等の不便あり。（第八）和服は洋服の如く常に自分の氣に適ひたる樣に形を拵らい置かざるが故に外出する度毎に帶の結び格好を拵らいさるを得ずして時としては二三人位掛りて帶の結び形ちを拵らいても尙ほ氣に召さぬこと抔あるのみか車に乘りたるときには帶の形ちを損せざる樣とて背をくの字なりにして坐する等の究屈あり。（第九）和服は總躰開け放ちたる躰裁にして殆ど防寒の用を失するか故に自然數枚の衣服を重ねざるを得ざるのみか綿を入たる者を用ひ殊に裾の方に澤山綿を入て重みを加へ裾の開放を防ぐ等皆衣服の形狀よりして自然斯の如き必要を生じ來りたる者にして不便不利極まれりと云ふ可し。（第十）日本婦人の

服装は總躰々の中部に於て張り出し足の方に至り隘ませる故に身躰が低く見へて且足の歩狀も現に見へ何となく下品にして見惡るしきも洋裝は躰の下部に到に從て擴張するか故に身躰も高く見へ且足の歩狀も現に見へず如何にも優雅に泰然たる風ありて美術上自然的に婦人に適當したる服裝と云可し。

（未完）

撃て出るが男氣に非ず、熊本城に籠城してこそ隆盛の軍を挫くとが出來ます、男子と同等と成りたいと思ふ女あらば、家から外に出でゝ競爭するに非ず、いよいよ家内に立こもりてホームを立派にするに在る。

批評

○近時の女學論

（一）。女界に於ける國粹保存論

國粹保存論は、近頃の流行物ゆえ、追々と女界にも侵入し來れり。最初は、左程にも無かりし論者の方々、近來甚はだ慷慨にお成なされ、舞蹈、洋服、コーセット、を頭までおしに攻撃せらる（此等は當今皆な下火の傾きあるにも係らず）。成程、吾人も或る意味に於ては國粹保存論者なり、又或る限り迄は、世間の國粹保存論にも贊成いたすとなり。即ハち、日本の御婦人方の忍耐の仕樣には感服せず、但し其の忍耐心の強き所ろは保存したし。日本の御婦人方の貞節の仕樣には感服せず、但し其の貞節心の強き所ろは保存したし。日本の御婦人方の優美の現はし方には感服せず、但し其の優美心の切なる所ろは保存したし。日本の族制には感服せず、但し其の家族の結び付きの固き所ろは保存したし。日本の御婦人方の無學なる所ろは感服せず、其のお話しの出來ぬ所ろは感服せず、其のはづかしがり外にも出でず萬事卑屈らしき所ろは感服せず、但し其のつゝしみ深き覺悟の所（西洋婦人の學問あるものゝ如く生意氣あらず）其の温和にして寡言なる心得の所ろ（西洋婦人の如くチシヤベリあらず）其の謹愼にして萬事扣へ目にし、萬事、男を外に現はし、男を先に立つる用意の所ろ（西洋婦人の如く、行過て亭留主同樣溝に落ちず、病人の如く男を下に敷くとなく、天狗の鼻の如く出しやばるとなく）、は保存したし。義の固き所ろ、廉耻心の多き所ろ、皆合せて保存したきもの也。故に、此等を保存せんと云ふ國粹保存論には、何人と雖ども贊成すべき筈なり。但し二三年前、舞蹈の甚はだ盛んなるとき、吾人は隨分に激論したる心得なり、交際の流行立てに、吾人亦隨分に激論したる心得なり、洋服熱の甚はだ高き折、吾人亦隨分に冷評したる心得なり、今の所謂る國粹保存論者、及び特に女學社會に於て、此頃俄かに國

粋保存論を唱へらるゝ方々は、彼の頃ろには何如程に論辨せられたるにや、吾人は頓と之を忘れたり。然し、論辨すべきの機會は、啻に彼の折に限らず、此節に至ても亦た固より堂々と論辨せらるべき點なきにあらず、只だ何卒すでに下火に相成つたるものを無暗と追かけ、徒らに角を矯めて牛を殺ろし、ケサを悪んで坊主を悪ましむると勿れ、願ふらくは、ちとお手軟らかになされたき事也。

(二)。美人を組成する要件

讀賣新聞は、北山居士の流行論第五、第六、第七に於て、美人を組成する要件三篇を載せて云く、

草木も丈夫あれば立派なり、禽獸も亦た丈夫なれば美くし、故に美人を成すの第一要件は其身躰の健康なるに在り。又人の貌は地の醜美の外に現容(エキスプレッション)の醜美と云へるものあり、之は其人の腹次第よつて出來るものなれば、美人を成すの第二要件は其心術の賢良なるに在り。

注。左れば絶世の佳人美婦と稱せらるゝものは皆な殆んど智識あるものゝ如し、埃及女王クレヲペートラと云ひ蘇國の女王メレーと云ひナポレヲンの妻君ジヨセフヒンと云ひ又我邦の小野小町と云ひ孰れも皆な一世の美人にして亦皆な才名を以て稱せられたるもの也。

之を以て、美人と爲るには、先づ衛生に注意し、次に敎育を受くべし、右二つの要件に頓着せざるものは、蓋し大方は美人と爲ると能はず。

眞に粋哲に達したるの論にして、吾人甚はだ敬服の外なし。但だ、一事の御注意申上げたきは、若しも、世の中の事物は需要に由て起り、美人の賣口好きは男子に美術心あるに由て起り、而して美人の賣口好きは亦た美人を呼越すの一需要たるを得るとせば、願わくは更らに第三の要件を立てゝ、亦是れ男子に多少の美術心あるに由ると致したし、北山居士、此修正説を何如んと爲す。

叢話

○慈善なる貴婦人方に、
下宿屋料理屋を設けられんとを勸む。

過る日、社友内村鑑三君が、東京北部婦人矯風會の請に應じ、本郷會堂に於て演設ありたる、尤も有益なる講談の中ち、本郷即ち帝國大學のある所ろ、書生連の多く集まる所ろの、此地に、貴婦人方が卒先して、下宿屋料理屋を開く可しとの一

段は、甚はだ耳新らしく、面白く、且つ尤も注意すべきの說なるが故に、左に其一段を、談話躰に綴り、讀者の覽に供ふ。

（上略）東京大學の近所に在る所ろの貴婦人達が、如何にして此數百人の青年を益し助けるとが出來るか、如何にして大學に通ふ所の數百の青年輩に、清き婦人の熱血を與へ、此青年輩の勉强を助けるとが出來るかと云ふに。私も幾んど十四五年間書生を致したから、何の樣な下宿屋にも往て見、何の樣な賄も食て見て、其中に難有いとには、總ての不都合を味つて居りますが。抑も、彼の下宿屋にまいれば、不潔な話しだが、下宿屋の婦人は、果して如何に取扱つて呉るか、お客の書生は成るべく少し飯を食て、成るべく家に居ないで、成べく早く月俸を拂ふとを喜ぶのです。又今日は改まつて居るか知れませんが、塾に這入つても同じとです、塾と云ふ所は、我慢して本を讀む所、拍子木が鳴れば香物で夕飯をカツコム所となつて居つた、其中に我々は清き社會の風を享るとが出來ず、綻びが切れても逢ふてくれるものもない。故に東京に留學中は、私の生涯に於て最もなさけない時でありました、夜更けて歸つても火はない、燈もない、實に異鄉に來て、たゞく苦しき思をなして、家が懷く、勉强もせず、床の中に這入つて嘆息したとは幾度だか知れません、其の艱苦辛酸を米國に留學したる間に比較して見て、私は實に感服しました。亞米利加では、澤山の下宿屋はあるが、一軒では平均二十人位を置きます、其の下宿屋を爲すものは、一日遣て儲からぬと廢めると云ふ樣な風ては無い、己れが所持する田園の物を以て書生を養ふのですから、牛の二匹位は何れの下宿にも在て、乳は每朝水の樣に飲ませます、四十年間同じ町に在て、同じく書生の世話をして居ると、私の宿の主人の話しでありましたが、其樣なが多いです。其細君は、例の所謂山の神ではない、我々に最も深切なる所の母であります、病氣の時には、其細君か但しは娘が來て、アナタは何の樣な御病氣か、何が食べたいか、何でも調理して上るからと言ふて呉れ升、綻が切れると、コチラから云ふ迄もなく、ア、綻びが切れて居るから縫ふて上げませう、其代り之を召せ、二三日內に出來るからと云ふて呉れます、私しも永らく其處に居りましたから、一家中とは、皆親密になりまして、何時歸つても、己れの家に歸る樣な心持がします、夜る歸つても明りの無いとはない、寒い時でも火の時には火の絕たとはない

能く深切に慰さめて呉れます、若し私共の心に心配があれば、心持が悪るいならば、娘が來て私を呼んで、ピヤノやオルガンを彈て遊ばうでは無かと、伴ふて行て心を慰さめて呉れます。左る故に、日に三四時間講釋を聞き、本を讀んで來ても、家に歸れば則ち樂みです、家に歸つて此丁寧なる取扱を受れば、少しも疲れは覺へない、翌朝學校の鐘を聞くと亦勇んで出懸ます」。

ソレデ、今日の此本郷近邊、或は日本全國の書生が受くる所のものと、西洋なる書生が享る所のものと、如何ある差異があるか、此も婦人矯風會諸君の御參考までに供するのであるが、能くお考へなされたい、彼の獨逸のライプシック邊りにまいりて、目新らしきは、例へばビスマルクとかモルトゲとか云ふような有名な人の名が、下宿屋の看版に書いてあるさうです、初めはわからぬ、何に因て有名の政治家などの名が書てあるか分からん、所が、之を聞くと、私の此下宿屋には、何十年以前に斯う云ふ先生が居たと云ふ名が書てあるのです。私の居りました米國の大學校などにても、全國から舊の卒業生を招きたる事があつたが、其時には、國會の議員や、土地に有名ある產業家などが、大相に集りまして、學士も、銀行頭取も、博士も、代言人も、悉く集りて其下宿屋の細君とは舊知にして、共にビステキを食ひ、ミルクを飲みし時の話しをして聞かせます、其婦人から受る所の感化力は、此日本に居りましては、迚も考へもつきません」。

夫而巳ならず、此節米國のミンニヤポリス邊に參つて見れば、婦人矯風會員中、富家の娘孃にして決して何の不足もなきものどもが、會員となつて何をするか何を重なる職とするかと云ふに、其市中にて、特に酒家の近處の家を借りて、或時は數十萬の金を出して、矯風會の料理屋を建てます、其所にては、夜の十二時までも咖啡を暖めて置いて廉價に賣ます、紐育の青年輩などは、別に家に在つても慰さむる人はなく、愉快を買ふ所もないから、一人で日を暮すより、酒家にでも行て暮さうと思ひます。所が、其酒家の隣とか向ふとかに、例の矯風會の料理茶屋がある、其所にて、音樂の道具はあり、清く美しき所の新聞はあり、六錢のものは五錢で賣る。而して其給仕人は、彼の下等社會なる婦人にはあらずして、最も勤直なる、開化されたる所の貴女方だから、一度其風に化せられて、一人正に移り、二

人歸し、遂に全く酒店に行くとを廢めて、潔白なる家に行く樣になる。私は又、毎にフヒラデルヒヤに行て感じました、如何にも、普通の二拾五錢出しての料理をします、併し其所に來る黒奴などを見れば、私しども、食物は旨くも、何となく躰裁が不十分です、其者が傍にビールを飲んで居る時は、實に心持は能くない、或は此樣な社會に感化されいしまいかと云ふ心が起る。併し婦人矯風會の建てたるフヒラデルヒヤの料理屋を見つけて、食事をすれば、矢張二拾五錢を投じて、飯を食ふのですが、只だ一の大いなるおまけと云ふものは、丁寧なると、深切なると、奇麗なるとです。ソレに、汚ない言葉を用ゐ、下等なる容姿を爲す、黒奴や、下等社會の人間は、私共のテーブルの側に來ません、ソコに來て呉れる所のものは、淸き婦人ゆへ、我思想もソレが爲に淸く、我人間たるの精神は、誠に高尚の度に進みます」。

ソレ故に、此婦人矯風會のお方、及ひ一般の慈善ある貴婦人よ、是れは御考へまでに供へるとですが、如何で御座いませう、此本郷邊に一の下宿屋を建てるとは出來ませんか料理屋を建るとは出來ません乎、私も書生を預つて居りますが、如何程私が敎育しても、一日三時間か四時間であるから、其感化力は誠に僅のとです、多くは汚れた婦人に接し、汚れた思想に滿され、私の述べたるとに於て、其書生の智識は增すか知れないが、又德育或は思想の高尚のとに就ては、少しも進歩しないでわります。併しながら、若し、學校から下宿屋に歸るに當て、家には己れを愛しむ所の母の如きものがわり、ソコには高尚の遊びがある、別に一箇の淸き社會があつたなれば、靑年に取りても、最も尊き所の賜ではありますまいか、之を從前より私は考へて居りました、多くの人でもあいが、私の友達など數人に話して見た所が、何れも大に贊成した、私も及ぶ丈は盡力も致しませうと思ふ、天下の靑年輩が輻湊する此本郷の邊に於て、抑も婦人の社會と云ふものは、如何のものか、淸き婦人の社會てふものは、串戯を云ひ、汚れた言葉を用ゐる所ろではあくして、却つて男子の社會に得ることの出來ないものを與へると云ふ觀念を與へしめたいのでわります、未だ惜しいことには、日本の靑年は、此感情を有しません、私も今日まで知らずに居たのです。故に諸君にして、神の敎の榮を現はして、本郷邊の靑年輩を淸潔の道に導くは、他に

も或は方法が有るかも知れないが、私しは此位い、直接の關係を有して、且つ大利益あるものは無いと、獨り信じて居ります」。

○一唱百歎

源　光國

見ればたゞ何の苦もなき水鳥の足にひまなきわが思ひ哉

藤田東湖

ふたつなき月を河風如何にして波のうねくゝまき散す覽

平野國臣

君が世の安けかりなば兼てより身は花守となりけん者を

○樹陰に徘徊す

われと妻と、都下三伏の苦熱を後に見棄てゝ箱根山奥の一茅屋に假寓し、朝たは湖畔に共に書を讀み、夕べは船を浮べて共に漕ぐ、日中やゝ熱く風少なし、則はち共に綠樹の陰に徘徊し、妻は小說を讀んで獨り笑ひ、われ詩を吟じて靜に樹梢の鳥音を聞き、而して時に相見て默笑す」如此きは是れ、美なる伉儷當今の避暑遊びならん、女學子は兀坐、膝を相手にして原稿を草す。

○煙草を飲むの利害、問答（其一、問）

米國の學藝雜誌中有名なる「サイエンチフヒック、アメリカン」は、此頃ろ煙草を飲むの利益八箇條を擧たり。即ち、

一　男子は女子の如く丈夫なり、然る所ろ男子十八の中ち九人は煙草を飲み、女子は殆んど皆な之を飲まず、然らば煙草を飲むの害なき明らか也。

二　適宜に煙草を飲めば消化を助く、煙草を禁じたる爲に不消化病と爲りたるものあり、而して復た之を初めたる爲に、不消化病の醫えたるものあり。

三　ハムモンド氏は、煙草を飲みたる爲に、身躰の目方が殖えたるを見たり。

四　和蘭のボールハーブ氏は、二百年前に言ひたり、煙草を飲めば、饑飢を止むるの効ありと。

五　萬國の兵隊皆な煙草を飲む、ナポレヲンは其兵卒に嚴令して煙草を飲ましめたり、之が爲にモスコー退軍の折に莫大の便益ありたり、故に彼の硝兵と爲り番する兵卒は、命ちにかへても煙草を飲みたしと望むものあり。

六　煙草はさみしさを消す、故に獨りで居るものには、大相の便あり。

七　煙草は憂さを霽らし、心配を消し、一時人の氣を回へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さするに、大相の便あり。

八　煙草は勞を慰さむ、之を飲みて仕事すれば、飲まざる時より多く永く仕事が出來る、故に主なる文人記者は、大抵煙草を飲みたり。

斯く申し乍ら、子供は決して飲む可らず、子供禁煙の事は、政府より布令を出されても宜しと論じたり」。而して此の八箇條への答論は、去五月の健全衛生雜誌に見へたり、大略は次號に掲ぐべし。

○百人一首一口話　（第十三回）

鈴木弘恭講
八木鶴二錄

陽成院

筑波根のみねよりおつるみなの川こひぞつもりてふちとなりぬる。

此御歌は。後撰集にのせたる戀の御歌であります○筑波根は常陸の國にある名山也。根は假借字にて嶺巓岑峯の字いづれもねとよめり。山の高き所をいふ也。又みねといふは眞嶺にて最も高き所といふ意にて。山といひ。み山といふと同意であります。さて筑波ねのみねと云てはねが重なるやうでありますが。秋の田のかりほのいほと語路の續きにてかさねたると同意にて。筑波ねのみねよりおつるは。なほ筑波山の嶺より落るといふほどの言であります○みなの川は。この山の嶺に有て常には水なければ水無の川といふ也。雪解のとき。或は大雨の時に始めて流るゝ也。然れども此の川の末を櫻川といひてつねに水の流るゝは。水無の川の水の一滴づゝ岩根を傳ひ土中を潜りて流れ落るなりと。古よりいひ傳へてあれば。それをとりてよませ給へたのであります○一首の意は。筑波山の嶺より落るみなの川の人に知られないで淵となりて流るゝが如く。我が戀も人に知られないけれども。積りて淵の如く深くなりてあるよと也。此の御歌はみなの川と云ふまでは序の意にてよみなし給へるやうに見ゆれど。此の川の因によりて殊に巧みによみなし給へる也。○語格は。一段切れの御歌也。こひぞといふぞが指辭にて。ふちとなりぬるのぬるにて結べる也。

小説

○さすがに双紙

美妙齋主人

第四篇　餅屋は餅屋。花盗人は花盗人。

宿屋の庭の中を逍遥しながら花房と時子と話を爲て居る聲。

「え、阿時さん、駒が嶽へ行ッて見ましやう」。え、朝だッていゝぢやありませんか。まだ七時にはなりませんよ。え、駒が嶽へ、爽な空氣を吸ひに。

「えゝ、左樣ですねェ」

「氣の無い御返辭ですね。御否？」

「でも有りませんけれど…貴下と妾とたッた二人ぢやア……」

「ようムいまさア。いらッしやいよゥ」。

この「いらッしやいよゥ」は宛も顏をしかめて言ッた聲のやうで、その下から時子の「おほゝ」が引續いて聞えましたが、それぎり跡は人の聲も爲ません。

之を横の方で偸聞して居た者が有ります。即ち栗殼鋭之介です。「では二人で駒が嶽へ散歩に出掛けるな」と考付ましたから妬ましくてこらへられません。

直に身をひるがへして栗殼は花房の居間へ行て見ると果して其處に主は居ず……下女が丁度來合せましたので花房の事を尋ねると駒が嶽へとて出掛けたさうです。

「こいつ十分駒が嶽へ…時子とたッた二人づれで

……跡を追ッて邪魔をしてやらうか」。
「だが、まア待ッたがいゝ。念のため時子の部屋へも行ッて見るがいゝ」といふ聲が何處となく無茶苦茶の胸の中に聞えます。
直に時子の部屋へ行て……見れば……あゝ無殘、畜生……時子も其所には……時子ばかりか誰も其所には……
「氣のつかぬ所でならどう爲れてもまア諦らめやうが有る。けれど、それと知解つて居るところで小胸のわるい事を爲れては……乃公だッて大丈夫だ……一旦かうと思込んだとを他に奪はれて仕舞ッては……だからこりやア罪な樣だが、だうしてもかうしては居られない。 迂路して花房に出遇ッてやッて、駭かせて、やッてそうしてその……」
我と我身に辨護を加へて、さて身づくろひをば爲ましたが、しかし其實駒が嶽へ行ッてたとひ花房を駭かしたにもせよ、ろれが何の益になるか、それは栗殼も知りません。 知らないでから騷ぐのです。 嫉妬の力も實に怖ろしうムいます。
「おや旦那、どちらへ?」 栗殼が出掛ける樣子を見て宿屋の下女が問掛けました。
「なんだ、わすこだ」。
「へどちら?」
「うッとしい。 花房だ」。 自分勝手に勢込んで叱付けました。 下女は呆果てゝ居ます。
「花……房さんなら駒が嶽へ、たゞ今」。 下女がしばらくして言出した言葉を背に受けたまゝ、稍家を出て後栗殼は獨言のやうに、
「おれも駒が嶽だイ」。

○小說神髓

蘇格氏著　ケチルヲルス　(第二十五回)

狩獵の御遊も終り晝比ろレスターー侯パーチーに出で會はるパーチー密かに今朝の事を申し出し必竟は夫人が其侯の妻として陛下に見へがたきを不滿足に思し召し遂に時を待つに耐え得ずしてカムナプレスを脫走し來られたるように言做したり侯は之を聞いて甚はだしく憤どうりエメにして若し斯る失策を爲ざるならば今朝の不幸には出て會はざりしものを吾れ此のデボンシア一紳士の娘に英國に二つとなき高位の分け前を與へんとて只だ其の時を相待つなるに如何に頑是なしとて程こそわらめ眞實らしき女とは申せ其前後を考へざる小供らしき所置は余れを怒らすなりと大いに立腹せられ之よりエメが

預けられたる許に行かんと云ふパーチー自ら危ぶみ戰栗して之を止むれども侯は聞かず遂に之を伴なうてシウルスベリーの止宿する所へ赴かる。

エメは髮を亂し衣物も亦た甚はだ整はでありしが今まパーチーが戸を開らひて入り來るを見て喫驚し那の惡者、何の新らしき惡事を思附きて復もや此處へは來れるぞと叫ぶに、レスター侯ヅッと身を挺しサー、リチヤード、パーチーにてはなく現參するは余れなりと言つゝ入り來らるゝにエメは再び仰天して其儘ひしと首にすがり着き涙を垂れ顏を押し當てゝ喜こぶレスター侯はエメが其の申付を破りて出奔したるを怒り乍らに今ま此の眞實と愛情とを混じたる切なる歎げきに會ひて殆んど之を忘却し暫らくして其顏を覗き扨ても太たくやつれつる哉病氣にてはあかりしやと、問はれてエメは漸やくに顏を擧げ過日君に御別れ申してより病氣、困難、さまぐの苦しみに出で會ひ侍りき、然しエメよ汝ぢは余が命令に反むきたる爲に只だ余れのみかは汝ぢの身の上にまで迷惑を掛けたるを知るあらん、何に妾わのみならず君が御身の上にまで御迷惑を掛け候うとな抑も妾わがカムナプレスを離れたるは實に是非なきとにて他に致し方のあき故にて候ひしが然し君が此上とも今一應是非とも元に歸れと仰せあらば妾わは何條御言葉に反むき侍らん、エメよ汝ぢ若し余が城に留まらんとせば暫らくパーチーの妻に爲り呉れずば成らぬ、何を仰せある乎君が妻を人の妻と爲し玉ふのみか剩さへパーチーの妻に成れと仰せある乎、パーチーは余が眞實なる僕べにして己れの右手よりも尊とし左樣に卑しめ玉ふな、君は尙ほ斯く信じ玉ふよな然し妾わがたゞ一つ申さば何故ゑ妾わが彼を卑しむるかの道理を知ろし召すべし今ま之を君に申すかとて彼は心中には戰栗し御覽候へあのよう青く相成候君にはたとひ彼を要し玉ふとありとも餘まり御信用なきが宜しからん、レスター侯は色々に申してエメに勸めらるゝ折りパーチー傍わらより口を出し其御相談も臣にて御差支へとあれば夫人が幼少の時よりの御友人トレッセリアン殿よ伴はせらるゝとには多少の疑念を懷き居るより余れに彼れが名を申して呉れるあとて最と不快らしく答へらるゝに、エメは毅然としてトレッセリアン殿は君が御疑がひ遊ばす如き人物には候らはず妾わは其人を愛するとを得ざりしあれ其の性質を非るものあれば之を保護いたさねば相濟み申さずと辨じ乍らパーチーの面て

を睨まへて聲するごとく暫らく汝ぢが僞善の皮を剝ぐことを容赦すべきが、トレッセリアン殿の正實なる如き正實は保護せずば成らぬ、レスター候は不快らしくして立つて居りパーチーは無實の罪を言ひ掛けられたりとの樣子して默して扣へたり。此時エメは色を改ためレスター候に近づきて口を啓らき今ま此の困難ある塲合に臨みパーチーの妻と爲るべしと仰せあれども妾わは死すとも之を御受け申しがたし只だ一言の妾わが申條何卒御聞き候へかし、と身を正しぬ。

佳傳

○ポンヂタ、ラマバイ、サラスバチ女史（其二）

斯て漂泊する中ち女史が十六才の年に至り前后六週間を隔てゝ兩親ともに不幸にも死去したれば之れよりは其兄と共に所所へ遍歷しカルカッタの都に出でたる比ろは當時有名の學者達の面前にて試驗せられ遂にサラスバチと云へる尊稱を與へらるゝことゝ爲りぬ、然るに暫らくして其兄も亦た死去したれば其后半年にしてベンガルの紳士ビビウ、ビハリ、メトハビ、と云ふカルカット大學の卒業生に嫁し凡そ十九ケ月間幸福なる交らひありしのち其良人も亦たコレラ病に罹りて死しぬ。

左れば女史は今ま一人の娘マノラマと云へると共に遺され眞正の寡婦と爲りたれば之れより再び以前の演說者と爲り印度婦人の改良及び敎育に專任したるが其熱心は數多の朋友を買ひ得殊に英人にして數多の賛成者も出で來にければ女史が盡力の名は英國にも喧しく相成りぬ女史は此等の便利を得て更らに敎育の事を取調らべんと志ざし印度を離れて英國に渡り凡そ三年間留まりて止みなく熱心に其取調らべを爲されたるが其內ち二年間はチエルテンハム大學に於て梵語の敎授をも擔當したり。

斯てある中千八百八十六年卽ち一昨年の三月十六日是又印度の女子にしてアナンヂバイ、ヂヨシー夫人（Anandibai Ioshe）と云へるが費府女子醫學校を卒業して當日其卒業式あるに付き來臨しては如何んとの招待あり由て女史は其時九才の令孃を伴ひ太西洋を横ぎつて米國費府に到着ありぬ。

此の米國に於て所々の演說場にて女史が慷慨せられたる所、其の演說によつて國民の同感を惹き起し得たる所ろは既でに米國諸新聞紙上の大評判と爲り吾が女學ざつしにも每度之れを記載したるとなるが實に印度に在る最と少かき寡婦の無數なるものに切めて家とも思はる學校を設け遣はさんとの女史

が志望に至ては凡そ一度び其説を聞くものは何人と雖ども皆な同感賛助の念を起さゞるはあらじと思ふ、女史嘗て某演説塲に於て述べたるやう、

印度にては女子が約束の男子先づ死して其身の寡婦と爲るは是れ其女子が前生に於て犯したる罪業の罰なりと思へり但し其の寡婦にして若し男の兒を有たば固より均しく前世の罪人とは爲さるれども左樣の冷遇は受けず彼の女の兒を持つ所ろの寡婦の如きは尤も冷淡に取扱はれて諸人の惡しみを受くると也、然れども此等にも立越えて更らに甚しく世人の惡くみ及び冷遇を蒙むるものは彼の最大の罪人として考へらるゝ少かき寡婦なり（八九才の頃ろ必らず約束の男子を定む此の男子もし一度び死せば最早一生寡婦となると印度の法律なり）一躰印度の女は其の髮の毛一すじだに失なうは其命を失ふよりも惡しきとありと思ひ居るとなるに右に云へる寡婦どもの中には二週間毎に必らず一度づゝ頭を剃られて尼と爲る者あり斯の如き有樣なれば十四才十五才の寡婦にして其身は何故に斯く殘酷に取扱はるゝやとの理由を知らず只だ其の特別に苦しめらるゝを悲しんで容貌哀れ氣に常に淚を垂れて眼を泣きはらすものあり又寡婦は常に一枚の粗末なる着物を着て一晝夜二十四時間たゞ一食み限られ夫すら家族と共に食するを得ず毎朝他の者を見ざる中に若し寡婦の顏を見れば不淨至極なりとして家族にだも疎遠にせられ親族隣人は只だ之を譏謗せんとに骨折り凡そ一生一日だも「汝ぢが良人の死したるは汝ぢが前世よりの罪業深きに由る」と非られざるの日なし其上寡婦は尙ほ新たある惡業を犯して其家族に一層の不幸を持來るとはなきやと始終疑ひの目を以て監督せられ常に家内に閉ぢ込められて女の友人とすら談話するとを禁ぜらる云々

此を聞て何人か泣かざらん哉、故に米國に於ては所々の大學中學内にラマバイ會と云へるを設け其志を助くるものあり又女史が著作せる「印度貴族婦人」と云へる一書は固と其の賣上金を以て志ざす所ろの家庭を作らんとの目的なるにより旣に之を買て義捐の念ひを盡すものあり（書は一冊一弗三十五錢當時費府廿一街千四百號ラマバイ宛にて得らるべしと雖ども近日女史が渡來の折り都合によりては吾社其の賣弘め方に盡力するともあるべし）。

之を聞く女史は風采質素淡泊にして心强く情正しく且つ義を見て甚はだ勇さみ菜食を主義として嚴に之を守らるゝ由平素

前述する如く只だ印度婦人の改良敎育に盡力して餘念なきものなれば蓋し是れ「昔しシーサーが管轄したる丈けの女子に二倍する多數の婦女子間に於て之が改良の朝たの星と爲れる」女丈夫と云ふべき哉

寄書

○日本婦人の洋裝　在米國ボルモント大學　根本正

女學雜誌第百十二號に婦人の洋服と題し安原てる孃の御投書は甚だ肝要の點を論し日本の貴婦人は其如何を辨別致候事要用の事と存候米國人にして日本婦人の改服を非と話し候者も有之候得共正は其語の不信切なるを知り更に意とするに至らず正は高木海軍々醫の說を以て日本の實用に適するものと存候勿論コーセットの如きは洋服中の惡弊なるものゆへ斯の如き餘計なる品は着用するに及ばざるも一躰の洋服は一日も早く男女共に改めたきものなり米人中多く日本女服を以て美麗なとゝ申し日本人の服を其儘にして舊慣を用ゆべしと云ふものあるは全く日本人をして世間外の奇物となし申さば見せ物に致置世の笑を后來に遺さんとの主旨にして決して忠言愛國の語にあらず若し眞とに日本婦人の服をして天下無二の佳美な服とせば英米の婦人は何故に自ら日本服に改めざるや英米人自ら日本服に改めずして是日本婦人をして舊來の服を以て滿足致さしめんとは矛盾を極めたる語なるべし諸氏宜しく此書に頓着せず速かに高木軍醫の說の如く日本婦人の服を洋風に改めらるべし英米の婦人が洋服の害を云ふは全く胴着の一害を去らんとの語にして決して全躰の洋服に關すべき者にあらず故に日本の男子婦人方は速かに洋服に改められんことを望む。

新報

（此欄内自由に轉載を許す）

○敍任　東京高等女學校教諭鮫島晋氏ハ去七月卅一日非職を命せられ長谷川方丈氏が更らに同教諭を命せられたり。

○勤勞の報賞　東京府レース教場の教師英人ミスセス、ジョン氏は今回解傭せられしに就いては多年の勤勞を賞せられ府廳にては同氏を去月三十一日同製造場へ招待して餞別の爲め種々饗應せられ金百圓と蒔繪の文庫（代價五十圓餘の品）を送られたる由。

○レース製造場　同場にては是れまで白色の各種レースをのみ製造せしが今度我國產の生糸を黑色に染めて試みに數種を織りしに軟かく光澤ありて裝飾品には適當する結果を得たるより近々佛國に送りて批評を受くる見込なりと云ふ。

○產婆生徒募集　麴町八町目の產婆學校にては拾五歲より五拾歲までの生徒五十名を募りゐ二十五名は入塾せしむると云ふ。

○松山の博愛醫院　豫州松山に於ては赤十字社と同樣の目的にて博愛醫院診察所を設け陸軍病院長二等軍醫正北村正存氏を始め軍醫は殘らず每日午後一時より同三時まで出張治療すると云ふ。

○女教員採用　大坂府にては尋常小學校に女教師を用ゐざりしが今度東區部内の各尋常小學校へ二名づゝの女教師を採用する事になせし由。

外報

（仝上）

○ガリバー孃　米國マウントホリヨーク女學校の校長ヂウリア、エッチ、ガリバー孃（Miss Julia H. Gulliver）には此度スミス大學より哲學博士の學位を贈られたり。

○シラキウース女大學　今度米國のシラキウースに創設するクロース女子大學は建築費五十萬弗の積りにて全世界中最も立派なるものゝ由。

○師範校女校長給料　米國ニウヨーク師範校々長リヂア、ワドレー孃（Lydia Wadleigh）は紐育府中にて尤も給料を多く受けらるゝ教師なるが其年俸は二千四百弗なりと云ふ。

○女學特待生　大學卒業后の學生に特別の金を支給し自由に其學科を研究せしむるを特待生と申す現に米國のコルネル大學にては八人分、ウイスコンシン大學にては九人分、ブラインモウル女大學にては六人分、エスレー女大學にては一人分の備へあり（此內初の二つは男女の何れにも與へるらるゝとなり）又英國カムブリッヂのニウハム女大學にては一人分の備へあり。

○日本婦人　英國貴女雜誌六月廿一日分に云く日本は近來何事にも非常の進步をなす間だに於て女の事の進步は取分け實に驚ろくべき程なり東洋人の常として女子を冷遇する風習の盛んなる中ちに日本人は近比ろ東京に女大學を造り英國の婦人等に其管理を委托したり（女子奬勵會の東京女學館の事なるべし）又洋服、敎育、皆な西洋風に似て日本の女子には著るしき進步を爲しつゝあり彼のラムセー孃（去年カンブリッヂ大學にて大名譽を博したる事每度其比の女學雜誌に載せたり）に競爭するほどの者の現出せんこと遠からじ元來日本人が他國の風習をマ子之を適用するとの甚はだ早きは今ま倫敦に在らるゝ河瀨公使の夫人を見ても分かるべし夫人は英語に巧みにして洋服の着こなし其の裝ほひ純然たる英人の如し彼の立派なる馬車に乘て公園を驅けさせらるゝ時は其のモンゴリア人種の婦人なりとは大抵の人に見分けがたきほど也云々而して同夫人の好みの服色迄を記るしたり。

○印度高等女學校　は既でに印度アルラハバッドに於て設立せられ生徒は既に一百名あり。

○獨逸先帝　獨逸先帝は甚はだ婦女を優待せられたる方にて其の尙ほ皇太子にて在わす比ろ某が「女の樣に泣くな」と申したるを聞尤め女の如くとは失敬の事なり寧ろ頑是なき子供の如くと申すべしとありゐ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●出版書目　先月中官報を以て廣示ありし書籍の中女學に關するものを擧ぐれば左の如し

藪の鶯	一冊	著作者／發行者	田邊龍子／原亮三郎
當世女用文章	一冊	編輯者／發行者	宮本興晃／高木和助
實驗家庭の敎	一冊	講述者／筆記兼發行者	高瀨眞卿／竹內樸卿
類題明治和歌集	二冊	編輯者／發行者	上田文齋／青木恒三郎
婚姻條例	一冊	發行者	山口恒七
東洋畵手本	二冊	著作兼發行者	八木兼辰
明治廿一年御歌會初御題詠進歌集	一冊	編輯兼發行者	橘道守
伊素志の屋歌抄	一冊	同	龜井玆明
男女交合造化機新論	一冊	著作者／發行者	細野順／村上眞助
造化懷妊論	一冊	編輯兼發行者	瀨山佐吉
家庭衛生論	一冊	編輯者／發行者	山本與一郎／岸部鶴松
乙女の善行	一冊	編輯兼發行者	三浦徹
新編古今毒婦傳	一冊	發行者	赤松市太郎
師傳必携子供の性質	一冊	著作者／發行者	渡邊嘉重／內田鶴吉
掌中細君之友	一冊	編輯兼發行者	山崎果平
羅底氏婦人病論卷四	一冊	同	原田貞吉
歌謠敎育論	一冊	著作者／發行者	西村正三郎／辻敬之
聖書名婦傳	一冊	編譯兼發行者	堀江景宣
エリサベツ小傳	一冊		
ライラ女の實錄	一冊	同	高橋五郎

小供談

○心の變り易き人（下）

丁度其前に息ひ居る是も町人躰の人が大層大きなる鷄を一匹持まして頻りと其毛を撫ております彼の旅人は大層立派な鷄であると少し欲しき心を起しまして其人の方へ向まして其由を申しました彼の人は心の中には今まで自慢せし豕を忽ち一匹の鷄と換へんと云ふ人の心の變り易きを笑ましたなれど何しろ豕と鷄との交易ゆへ損はなしと早速承知致しまして其豕を見まして大に驚き「イヤこれは後の宿にて盜人に盜まれしとて非常に騷ぎし豕に違ひない其豕を如何にして得しや若しこの豕をもつて次の宿に至れは直に捕へられ盜人と呼はれて獄に入らんは疑なし由ある品を持つ人かなと申しましたを旅人は聞きて色青ざめガタ〳〵震ひながら何ぞお助と思ひて其鷄と換て下されあなたの道とは方角も違へばあなたはこれを持ち玉うも大丈夫ドーゾ換へて下されと無理に換へてもらいヤレ〳〵これで安心此鷄は中々に重ひ肉も澤山ある此毛で

枕を作らば定めて心地よからん抔と喜びながら行きました時に日も暮かたにて腹はへりたりされど身に持つ物は鷄一羽錢一文もなければ一碗の飯も求め難く又此夜の宿をも借り難しと又もや錢に思ひ付き前の金袋の欲しくなり金は何所にか落ちてはあらぬか金の山は何所に在ると獨り語しつゝ行くうち町端に一軒の石屋あり頻りと歌ひながら石を割りて居る其歌を聞よ「石屋のヤア槌はナア大黑天の槌かいナ打つ度毎に金か出る堅ひ〳〵」其意は働けば必ず錢は出來る一つ打たる槌の働きも積れば幾多の錢となるされど中々六ケ敷ことであるといふ意ならんこれを聞し彼の旅人は奇躰な事を云ふ奴かなして見るとあの石の內に金が在るに違ひないこれぞ金の山なあるかと無理無躰に其石を求め其代價として彼の鷄を與へました石屋は丸で其意味も知らねども無理に石を求むるものから致し方なく其石を與へ其鷄を料理して晩酌を助けまして快よく寐ましたが彼の旅人は其重ひ石を疲れたる躰にて運び行くものですから直ちに足も立たぬ樣になりましたこれではたまらぬさらば錢丈けでも取りて行かんと槌を以て頻に其石を打ちますれど一つも金は出來ませぬイヤ欺されたりと初めて心つき其石も槌も共に投げ棄てまして次の宿に至り宿を求めますれど一文なき旅人なれば何所にも宿借す家なく如何せんと思ふに元來始め家を出る時に親と喧嘩をして出てきた事ゆへ今に至りて無手で歸りもならずサリトテ錢がなければ饑へて死するより外はなし如何にせんと非常に困しみましたが其後其家に歸りましたか又は饑死しましたか最早影も形もなき可憐なる人となりましたゆへ其後の事はお話し申す由がありません。

○印度物語　第六　貴人と紐

或る人身は尊かりけれど遊藝の道には極めて疏かりけるが其國の習慣とて音樂の會の催しなどあるときは男は前の席につき女は幕の陰にあるが常なりければ斯かる折には此人〳〵に侮られぬ樣其衣の裾に紐をつけて妻にもたせかなめの所ろに至れば幕の陰よりひかせて物知り顏にほめ囃しなどし己が疏きを匿し居りけり或る夜好き歌ひ手の來けるとて招かれて妻と共に行きけるが歌ひの最中にて大切なる紐の切れければ忙はしく歌ひ手を止めしばし待たれよ紐のきれてさふらふと言ひけるを人々聽きて初めの程は其心をしらでおやしと思ひ居りけるが後に有りし事どもを知りて馬鹿と鸚鵡は人の引きたてによりて物言ふとて一座どつと笑ひけり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生徒募集廣告

定期試業畢る寄宿通學共入學を許す來る八月卅一日迄に申込あれ

明治廿一年八月

小石川柳町二十七番地
私立 跡見女學校

成立學舍女子部 高等師範學科、本科、初年科。。。。。。。。。。

各級に臨時入學差許候有志者は至急申込むべし

東京駿河臺袋町九番地
私立 成立學舍女子部

私立 明治女學校生徒募集

學年試驗相濟候に付最下級へ三十名其他欠員有之候級に限り入學を許す八月三十日迄に學業履歷書を添へ郵便にて申越さるべし在地方の人々には右書狀に據つて入學の出來べきや否やを答述すべし

東京飯田町三丁目卅二番地
明治女學校

本校新築落成致來る九月十五日開校日々教授候間有志の貴姉妹續々御入學相成度候也
規則書は郵券二錢を受けて呈送すべし

築地居留地四十六番地
高等佛和女學校

●滯金催促

岡山東田町 大島貴努

磐城國磐城郡玉山小學校 草野金三郎

大和五條聖三一公會 荒木政利

右は本誌代金滯り居候に付數回御催促申上候得共今に御送金なきのみならず何等之御回答も無之く甚はだ以て不信切無頓着の至りと存じ候に付更らに本誌廣告欄内に於て及御督促候也

明治二十一年八月
女學雜誌社會計掛

宮内省式部次官高崎正風君序○○加部嚴夫著

交際必携 婦女のかざし 繪入洋製美本一冊

正價金廿六錢郵稅金十四錢

此書は凡そ婦人の陛下に朝拜々謁侍宴奉送迎の心得皇族大臣府縣長官學校長教師に對する禮法より貴人紳士の宴會夜會舞踏會並同輩一般の禮法即ち行儀作法進退應對より庖厨食卓整理等に至る迄方今宮中及民間に行る者を擧げて編纂せし者なれば貴婦人女學生其他婦人方に必用なる書也

東京日本橋通四丁目書林椀屋
江島伊兵衛

交詢案内

（催促する勿れ郵券十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

九 下婢 年齡二十年より五十年の内の下婢一人を望む業務專ら飯焚勝手仕事折々洗濯等あり家族三人家事稍閑なり給料は面談の上可成基督信者を望む

十 教師 府下の某女學校にて東京師範學校女子部卒業生を雇ひたき處あり授業時間三時間位にて校内に止宿してもよろしとのと

●雇はれたき方（乙）

一五 召使 年齡十八才にして小學高等科卒業生にて小間使となり半日通學勉强いたしたし但し己の口を糊するたけ

一八 召使 年齡十四五才のものにて學資に乏しく依て小間使となり餘暇に修學いたさせくれる人あれば無給にて雇れたし雇主可成的基督信者を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし

二〇 裁縫 年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之内より小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

在米の米人學士

より して特に日本の教育に盡力せんと欲するものあり月俸百圓及び家族住居の家を用意せらるゝものあらば條約の上速に渡來あらんとす而して令夫人は音樂に長ず又無報酬にて夏人と共に其校に盡力あるべし右學士の學力及び篤行に關しては女學雜誌社員が保證する所なれば日本教育の爲に之を紹介するもの也志あらん方は來談を乞ふ

巖本善治

府下某學校卒業生にして英漢數簿記の**出教授**を望むものあり望の方は芝今入町廿三番地興水内新發田まで御來談あれ但し自宅教授にても不苦

發兑

七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
八月。	四日	十一日	十八日	廿五日
九月。	一日	八日	十五日	廿二日 廿九日
十月。	六日	十三日	二十日	廿七日

定價

一册。五錢 郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。四十八錢郵税。十錢（同前）
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田晏貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年八月九日印刷
明治二十一年八月十一日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY